

読書運動（読書週間）・私論

昭和45年史学科卒・徳島県立図書館

新 孝 一

読書とは

読書と図書館は切っても切れない関係にある。たとえ娯楽や趣味で図書館を利用しようと、学問的な調査研究で利用するにしても、その目的は人が本や資料を読むことである。図書や雑誌を読みたいという読者があればこそ図書館は成り立っている。図書館はつねに読者の存在を想定しながら運営しているのである。

本来、読書はきわめて個人的で主体的な営みである。本を読むこと自体は、自分ひとりの世界に浸り、新たな創造をかき立てることである。もっとも、グループ学習等では集団で調査研究する。その場合でもそれぞれの構成員が個別の資料にあたり、共通のテーマをお互いに追究していることが多い。

しかしながら、読書の啓蒙・普及等を目的にして、不特定多数の集団を対象に、組織的に読書活動を広めたり深める運動がある。一般には読書運動とよばれており、その様相は複雑である。ここでは読書週間をとりあげてみたい。

読書週間と標語にみる世相

読書週間は、関東大震災の翌年1924年（大正13）に日本図書館協会がよびかけ、11月17日から23日までの1週間に、読書の鼓吹、図書文化の普及、良書の推薦を主たる目的として開始された。さらに1933年（昭和8）に図書館週間と改称され、図書祭として実施している。

1938年（昭和13）には日中戦争の影響を受け、国民精神復興週間に呼応し変貌している。翌1939年（昭和14）に読書普及運動として11月8～12日までの5日間で継続を計ったが、時局の緊迫化から運動は中止せざるを得なかった。

第二次世界大戦後の1947年（昭和22）、読書の力によって平和な文化国家を作ろう、との決意のもと、出版社、取次会社、書店と公共図書館が中心となり、新聞・放送などマスコミも加わり、11月17日から1週間開催された。第2回目から文化の日の前後2週間を読書週間として今日に至っている。

第1回標語は「楽しく読んで 明るく生きよう」である。敗戦後の廃墟の中から立ち上がろうとする意気込みが感じられる。その後、数年間は大きな特徴はない。第10回になると「読書がつくるよい家庭」と家庭との関連が初めて登場する。その後は「そろって読書 明るい家庭」（第11回）、「読書でつくろう 明るい社会」（第12回）など、読書と家庭や社会との標語がでてくる。テレビが一般家庭に普及する以前で、読書は娯楽でもあった時代である。

1970年代の高度経済成長期には「レジャーを本で」(27回)、「本との出会い 豊かな心」(第28回)、「翔べ心! 本はその翼である」(第32回)など、社会生活が多様化していく過程で読書の重要性を主張しているかの感がある。やがてバブル最盛期の1980年代になると、「読書はあなたの無限の宇宙」(第36回)、「読書は新しい発見の旅」(第37回)、「キラリ知性 秋の一冊」(第39回)など、浮き浮きした感覚である。

バブルが弾けた1999年以降は、「あと1ページがとまらない・・・」(第53回)、「はじまりは1冊の本だった」(第54回)、「ありますか?好きだといえる1冊が・・・」(第57回)など、一冊にこだわった標語が目につくようになる。

図書館界と読書運動

戦前の読書週間は、当時の国策であった富国強兵の波に流されて、良書の推薦がとくに重要視され、やがて思想善導へ突き進んでいく。1939年(昭和14)文部省による「一般週間運動廃止令」によって、読書週間自体も破綻を迎える。

図書館界はこのことを厳しく反省するとともに、読書運動には過剰反応を示すようになる。第二次大戦後、文化国家建設のスローガンのもと、読書週間の再出発に立ち上がったのは図書館界ではなく、日本出版協会や毎日新聞社等であった。

戦後の読書週間は、読書の普及・推進と出版文化の向上を目標として、1947年(昭和22)に再開されたが、その背景には占領軍C I Eによる米国のChildren`s Book-Week(11月16日から1週間)の示唆があった。

戦後はじめての読書週間が好評だったこともあり、運動を年1回の行事だけに終わらせず、常時読書普及の推進を図ることを目的として読書推進運動協議会が設立されたのは1959年(昭和34)である。また、この時期には「P T A母親文庫」(長野県)や「母と子の親子20分間読書運動」(鹿児島県)など、県立図書館を中心とした全県的な読書運動が高揚していた。

戦後の図書館界は読書運動にかなり慎重であった。むしろ民主社会の形成に逆行するとして極端に反発する向きもあった。おそらく現在も図書館界全体としては読書運動に必ずしも積極的とはいえない。その中で読書週間は、図書館イベントの一環として文化講演会や図書展示会、優良読書グループの表彰など、いわば類型化したケースが見られるものの、今なお全国的な規模で継続しており、社会的評価も定着している。

読書運動は読書会や親子読書運動、最近では「朝の10分間読書運動」等へも拡がりをみせている。また図書館設置運動とも密接に絡んでいる場合もある。今後は具体的な史料をもとに、図書館界と読書運動について考察してみたい。